

**【天気予報】**

天気は数日の周期で変わり、平年と同様晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

	平均気温 (°C)	最高気温 (°C)	最低気温 (°C)	降水量 (mm)
2016年	20.0	25.4	15.1	130.0
2017年	20.0	25.4	15.0	97.0
2018年	19.1	24.2	14.7	203.5
1981~2010年	18.8	23.5	14.6	118.6

※気温については、1ヶ月の平均値

**【作物】**

**1 水稲**

(1) 早期栽培の水管理

田植え後20日を過ぎれば、地温の上昇に伴い有機物が分解します。土壌中の酸素が不足し根のいたみの恐れがある場合は、間断灌水や水の交換を行って下さい。

茎数が確保されると、中干して根の活力維持と過繁茂の防止に努めて下さい。

(2) 普通期栽培の育苗

育苗期間は稚苗で約25日です。田植予定日に合わせて計画的な育苗作業を行って下さい。

ア 床土の準備

育苗用土は通気性が良く、適度な保水性がある用土を用いて下さい。市販の粒状培土を使用する場合は1袋で5~6箱分です。

イ 塩水選・種子消毒

塩水選の比重は、うるち1.13(水100に食塩2kg)を使用して下さい。種子消毒はトリフミン乳剤300倍+スミチオン乳剤1,000倍で24時間浸漬して下さい(浸漬時間は厳守)。

ウ 浸種・催芽

浸種は20°Cの水なら5日程度とし、浸種期間が短いと発芽が不揃いになります。浸種・催芽の目安は種籾があめ色となり、ハトムネ状態(幼芽が1mm程度出た状態)となれば完了です。

エ 播種量

催芽籾で1箱当たり180gまでとし、厚播きは避けて下さい。

オ 灌水・覆土

播種後、苗箱に適量灌水し、その後籾が隠れる程度覆土して下さい。

カ 温度管理

出芽期は30~32°Cで保温し、緑化期は15~25°C、硬化期は10°C~20°Cと徐々に外気に馴らすようにします。シルバーポリトウの被覆は高温となりやすいので、温度管理に注意して下さい。

**2 麦**

(1) 収穫前のカラスノエンドウ除去

収穫前には、もう一度圃場周辺を見回り、カラスノエンドウの完全除去に努めて下さい。

(2) 収穫適期

チクゴイズミ(小麦)で出穂後52日程度、ハルヒメボシ(裸麦)で出穂後48日程度です。

<松本>

**【野菜】**

**1 さといも**

(1) 病害虫防除

気温の上昇とともにハダニが発生するため、発生を確認したら早期防除に心がけて下さい。

病害虫名	薬剤名	希釈倍率(倍)	使用時期/回数
ハダニ類	マイトコーネフロアブル	1,000	収穫3日前まで/1回

※ジーファインとの混用は不可

(2) 全期マルチ栽培

子芋・孫芋の品質向上、マルチによる焼け防止と形状が悪く出荷のできない芋の発生を少なくするために、5月下旬頃から一輪管理機等で必ず土入れを行って下さい。

(3) マルチ栽培

通常のマルチ栽培は、5月下旬頃からおおなかを行います。おおなかの適期は、子茎の発生開始頃です。目安は、地上部本葉が4~5枚になった頃です。早すぎると、子芋の着生が遅れたり、芋が長くなる傾向があります。遅くなると、断根による葉焼けや生育の停滞が心配されるので、適期の作業管理を心がけて下さい。

(4) 露地栽培

萌芽が揃った頃に、高度化成444を40kg/10a施用し、除草を兼ねて土寄せをして下さい。

**2 やまのいも**

(1) 雑草対策

雑草の発生前に散布する土壌処理型の除草剤(トレファノサイド乳剤又はゴーゴーサン乳剤)は、土壌が乾燥していると効果が落ちますので、土壌水分の状態を確認して、乾燥している場合は、降雨後に散布するか希釈水量を多めにして散布して下さい。

(2) 芽の整理

2本以上萌芽している株は、早いうちに強い芽を1本にして下さい。芽かぎをする際は、芽の根元から丁寧に切り取って下さい。

(3) 敷きわら

敷きわらが、やまじ風で飛ばないようにバインダー紐等でしっかり固定して下さい。

<山口>

**【果樹】**

**1 温州みかん**

先月に引き続き、着花と新梢のバランスに応じた対応を実施して、本年産の着果促進と連年安定生産に努めて下さい。

(1) 着花量が少なく、新梢が多い樹

長く強い新梢は、着果促進及び幼果との養分競合を防ぐ目的で、せん除します。立ち枝やかぶさり枝を基部から間引いて、幼果周辺の光環境を改善します。

(2) 着花量が多く、新梢が少ない樹

着花過多の樹は、樹冠上部や新梢の発生が望める樹冠外周で積極的に予備枝の再設定を行い、新梢を早く発生させることで、今年の樹勢維持と次年産用の結果母枝の確保に努めて下さい。

**2 中晩柑類**

着花量が多い場合は、団子花(直花)、弱小有葉花のせん除を行い、充実した有葉花を中心に残すことで、優良な有葉果の結実と幼果の初期肥大の促進を図ります。また、新梢の発生が少ない樹では、予備枝の再設定を行い早めに新梢を確保します。

着花量が少ない場合は、長大な新梢や被さり枝を除去し、結実の促進を図ります。

**3 養分の補給**

新梢、新葉の緑化促進や着花過多樹での養分の消費を補うため、窒素主体の液肥葉面散布を実施します。また、着花過多の圃地では、併せて花肥(窒素成分量3kg/10a程度、速効性肥料)を施用し、早期に樹勢の回復に努めて下さい。

**4 灌水**

新梢、新葉の充実と幼果の結実、初期肥大の促進には、適度の土壌水分が必要です。土壌が乾燥した場合は、灌水を実施しましょう。

**5 病害虫防除**

訪花害虫(2~3分開花時)と灰色かび病(満開~落弁期)の防除は、適期に行ってください。

甘平のかいよう病防除は、落弁直後(5月下旬~6月上旬)が適期となります。薬害発生には十分に注意し、ICボルドー66D、80倍を散布して下さい。

<守屋>

**【花き・花木】**

**1 アネモネ、ラナンキュラス**

摘花作業がピークになります。こまめに摘花し球根を肥大させます。摘花した花がらは、病気の発生源となりますので、ほ場外に持ち出して下さい。

菌核病は、植物の地際部が白色綿毛状の菌糸で覆われ腐敗します。気温15~20°C・多湿条件で発病します。トップジンM水和剤1,500倍を予防散布して下さい。

病害発生株は早めに抜き取り、圃場外へ出し病害の拡大を防ぎましょう。

**2 シキミ**

春芽の伸長期になります。病害虫の発生が多くなる時期です。風通しの悪い環境で多発するので、垂れ枝や下枝の整枝・剪定をして風通しを良くして下さい。

アブラムシ、ゲンバユスデ、アザミウマ、ハマキムシ、斑点病の防除として、アドマイヤーフロアブル2,000倍、カルホス乳剤1,000倍、トップジンM水和剤1,000倍を混用散布して下さい。

アブラムシ、ゲンバユスデ防除のダイリーク粒剤(12kg/10a)は、5月中旬~6月に使用し、2mを超えない木で利用してください。

茶園や他の作物が隣接して栽培している場合や、ミツバチの巣箱の近くでは農薬の飛散に十分注意して下さい。

<安藤>

**【畜産】**

**(飼料用稲の栽培について)**

水田の転作品目として飼料用稲は重要な位置づけにあり、四国中央市では飼料用稲(飼料用米)の作付けに取り組んでいます。

**1 飼料用稲の栽培ポイント**

飼料用稲は既存の食用の稲と違い、インド系統の外国の稲を掛け合わせて育成されており、一般の食用の稲とは似て非なる作物です。多収を得るためには肥料をたくさん必要とし、多肥により分けつや伸長が旺盛に行われます。

一般の食用稲は10アール当たりチッソの必要量が6kg(コシヒカリ)~8kg(ヒノヒカリ等一般)であるのに対し、飼料用稲のチッソ施用基準量は12(殖質土)~14kg(砂質土)と約2倍量を施用しなくては食用米と同等以上の収量が得られません。

**2 飼料用稲の栽培にあたって準備すること**

①専用種子は県指導班または家畜保健衛生所の方で毎年2月末までをめぐりに予約注文を伺っております。その飼料用稲専用種子を使うことで10アール当たり1万円の助成金が加算されます。

②国の交付金(収量に応じて10アール当たり5万5千円~10万5千円)を受給するためには、水田再生協議会(市やJA)に転作確認の際に飼料用稲を栽培することを申告します。

③次に畜産農家との「販売に関する契約書」や「取組計画書」、「区分管理計画書」等を作成して中四国農政局愛媛支局に提出する必要がありますが、書類作成に当たっては関係機関が支援をしておりますのでご相談下さい。

本年産への新規取組みには間に合いませんが、来年からの飼料用稲に取り組んで耕畜連携により畜産農家と耕種農家の安定した相互関係の構築が図られますよう御検討下さい。

<住吉>